

子どもの心をらくにする保育を

秋山 和夫

「子どもを迎える第一の用意は、どうして子ども達の心をらくにさせるかにある」と、倉橋惣三は「育ての心」の中で述べている。うっかりすれば見過すような、何の変哲もない文章ではあるが、そこでは、現代の保育の中で、ともすれば忘れがちになっている側面を、わたくし達に示唆してくれている。

「子どもの心をらくにする」ことが必要であるというのは、幼稚園や保育所に限られたことではない。小・中学校においても、家庭においても、必要なことである。むしろ、教育の大原則である、ときえ言っつてよい。

学校内暴力事件を起こす子どもは、その学校の中で、心安らぐ場が見出せない子どもである。家庭内で暴力を振う子どもは、親の要求が高すぎたり、干

渉が過ぎて、家庭内で自分の心をらくにすることのできない子どもである。

わたくし達が「心をらくにする」ことができる場というのは、先ずは、必要以上の強制や干渉から解放された場である。そこでは、自分の主体性が保証されており、自発的な自己活動が可能となっている。次には、自己がその周囲の人から信頼され、自己の長所や特技が、まわりの人によって評価される場である。

こうした条件の下に人間がおかれた場合は、その人は、先ず、自分の心をらくにすることができるのではないか。

現代の教育が見落しているのは、この点である。学習し、あるいは、活動する主体者としての子どもは、学習を十分汲まないうで、学習させる内容や、活動

させる方法のみを考えることに精力を注ぎすぎてはいないだろうか。子どもの行動は情動に左右されるところが大きいということを忘れて、子どもの気持がどうであろうと、おとなの立場で、子どもにとって必要であると考えられる事柄は、どんな無理をしてでも、子どもに教え込まなければならぬと考えてはいないだろうか。

倉橋は、教育を考える視点として、「ひたすら目的を本拠として教育に臨んでいくか、対象の特質に基づいて教育に臨んでいくか」（『幼稚園真諦』）の二つがあることを指摘している。そして、「幼稚園の真諦は、何を保育の目的とするか、いかに能力に相当させるかということを考えるだけでなくして、いかなる生活形態に幼児を生活させるのが幼稚園の真の姿」なのかということが、考究されねばならないと考えられている。（『幼稚園真諦』）

つまり、どのような生活を幼稚園や保育所でさせるかということが、子どもの心をらくにさせうるか否かに大きくかかわっている。

先生の指示のとおり活動しなければならぬ。みんなと同じ行動をいつもとらなければならない。自分の好きな活動をしていても旗や音楽の合図があれば、それを止めて先生の指図に従わなければならない。——このような生活が、園でくりかえされているとしたならば、決して幼児の心はらくになり得ないであろう。

青少年の非行は、幼児期の甘いしつけにも原因の一端があるという世論をふまえて行われる訓練主義の保育も、決して幼児の心をらくにはしないであろう。

幼児期の教育は、倉橋もたびたび指摘しているように、子どもに情緒の満足をいかに得させるかということが前提として考えられなければならない。幼児の自由感と満足感を前提にして、自発的な生活が十分できるような配慮が何よりも必要なことであると考えられる。

（岡山大学）